

はじめに

奈良国立文化財研究所は1952年の創立以来、さまざまな分野の調査・研究を行ない、それぞれにみるべき成果を上げてきた。とりわけ平城宮・京の発掘調査はそのもっとも著しいものである。平城宮の発掘は、1959年7月に着手した大膳職地区の調査以来、本年報が対象とする1989年度までの30年間に、指定地面積131万㎡の約3分の1に当る37万㎡に達している。この間に、東院の張り出し部の発見や、大極殿・朝堂院の東西二地区での併存とその変遷の究明、さらに大嘗宮遺構の検出など多大の成果をあげ、木簡の発掘では古代史に全く新たな視点の文字資料を提供してきた。また、平城京の発掘調査は1970年代から急増し、最近では長屋王家木簡及び二条大路木簡計約10万点の出土によって、当時の貴族の生活や経済の実態を知る画期的な発見をもたらした。これらの成果をふまえて、1989年度は発掘30年を記念して、大規模な展覧会「平城京展—再現された奈良の都」を京都国立博物館・名古屋市博物館・東京国立博物館の各会場で開催した。展覧会は好評で、入館者数は30万人を越えたが、30年前の鉄入れ式に参加した者として感無量の思いがある。

しかしながら、1989年度の研究所の活動は、以上述べた「平城京展」にとどまるものではない。むしろ逆に、本年報の本文中に平城京展の文字が全く記載されていないのを見ても、当研究所がいかに多くの分野で仕事を行っているかがおわかりいただけよう。それは飛鳥・藤原地域の発掘調査であり、飛鳥資料館の事業と活動であり、遺跡の整備であり、古代から近世に至る社寺建築及び古文書の調査研究であり、そして埋蔵文化財センターが中心となっている科学的調査方法の開発・研究とその国際交流・地方公共団体等に対する指導や研修・全国の文化財のデータベース化と情報資料の公開などである。

当研究所は多面的に文化財保護行政の一翼を荷う一方、不動産文化財にかかわる学術・情報面でのナショナル・センターの機能が求められている。さまざまの分野の仕事をさらにどう前進させるのか、所員一同懸命な努力を続けているので、今後とも多くの方々の御支援と御鞭撻をお願い致したい。

1990年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉